

「サブカルチャー」再考*

難 波 功 士**

「文化というものは基本的には一群の人々が共通の問題に直面し、しかもたがいに効果的に相互行為とコミュニケーションを行なっている限り、その共通問題に照応して生ずるものである」ハワード・ベッカー

「人間は文化というメディアを通してしか意味ある行為も相互作用もできない」エドワード・ホール¹⁾

はじめに

店の中に、今晚は奥のバーで「ゲイのスキンヘッド・ナイト」のイベントをやっていると書いたボードがあった。こういう店では、いつもなら何が何だか区別のつかないいろんなカルトやサブカルチャーが、それぞれ独立した存在として扱われる。この街なら大きな自由を味わえる。(I. ウェルシュ著、池田真紀子訳『トレンスポットティング』青山出版社より)

スコットランドを逃げ出したレントンは、自分が今ロンドンにいることを、一枚のバブのボードによって実感する。ちっぽけなリースの街では、ただのチンピラ、はみだし者でしかない俺たちも、この大都会でなら「独立したサブカルチャー」として存在が認められている……。

では、その「サブカルチャー」とは何か。メイ

ンストリームの、ないしはドミナントな文化でないことは確かだが、カウンターカルチャーとは異なり、もちろんハイカルチャーではないが、マスカルチャーとも、ポピュラーカルチャーとも違う。ユースカルチャーやストリートカルチャーという言葉と、実態としては重なっている部分はあっても、サブカルチャーとは、必ずしも年齢や場所によって特定される文化だけを言うものではない。また、「下位文化」という訳語からは、文化の下位分類がサブカルチャーであるとのニュアンスも汲み取り得るが、「サブ」に込められた「副(次)」「垂」「準」「補」といった意味合いを考えれば、単純に「サブカルチャー＝部分文化」と等値して、「Σサブカルチャー＝(全体)文化」とするわけにもいかない。

要するに「サブカルチャー」には、現在、学術的な概念としてポジティブな定義が与えられてはいないのだ。時に一種の残余範疇として用いられ、またある時には、特定のスクール内での暗黙の前提として存在している。しかし、これまでにサブカルチャー研究がなかったわけではなく、サブカルチャーという言葉の folk use がある以上、当然それを対象とした研究が数多くなされてきた²⁾。例えば、レントンの辿り着いたロンドンでは、第二次大戦後、テディボーイズ (Teddy boys) もしくはテッズ (Teds)、モッズ (Mods)、スキンヘッド (Skinheads)、パンクス (Punks) など、さま

*キーワード：サブカルチャー、メディア、フレーム・アナリシス

**関西学院大学社会学部専任講師

1) ハワード・ベッカー著、村上直之訳『アウトサイダーズ』新泉社、1978年、117頁。ホール・エドワード著、日高敏隆・佐藤信行訳『かくれた次元』みすず書房、1970年、259頁。

2) 80年代をポール・ウェラーとともに“スタイル・カウンスル”として駆け抜けたミック・タルボットのユニット Yada Yada の、その名も“Subculture”というアルバムを聴いていると、現在イギリスでの「サブカルチャー」のフォーク・ユースは、「クラブ・カルチャー」的なものを指示しているよう。また De la Haya & Dingwall [1996] に見られる“Subcultural style, 1993-4”とは、かつてのヒッピーやトラベラーやレイバーたちからの引用であり、“Techno/Ambient”パーティやクラブ通いのためのコスチュームであったという。

ざまなサブカルチュラルなスタイルおよびグループが発生しているが、その社会学的な分析には多大な蓄積がある。

<サブカルチャー>のような概念は、はるかに特定の歴史的状況と結び合っている。それは英国におけるカルチュラル・スタディーズの研究のなかにおいて、若者の文化を記述し理解する努力の一端として生まれた。英国の若者文化は、ある歴史的な時点においては、一つの生^{ウェイ・オブ・ライフ}き方と呼ぶのに十分なほど、経験的かつ社会的な深さとスタイルの一貫性をもっていたのである。サブカルチャーという言葉はそれ以来、ときにはきわめて行き当たりばったりに用いられるようになり、本質的にはアメリカ的な余暇活動であるものに、サブカルチャーの地位を与えてきた。(Nelson et al. [1992=1996: 101])

無論アメリカにも、シカゴ派都市社会学に端を発し、非行や逸脱の社会学へと引き継がれていったサブカルチャー研究の歴史があり、さまざまなウェイ・オブ・ライフのエスノグラフィーやモノグラフが数多く産み出されてきた。最近まとめられた『The subcultures reader』でも、その第一部は「シカゴ学派と社会学的伝統」に、第二部は「バーミンガムの伝統とカルチュラル・スタディーズ」にあてられており、それら英米の研究をいかに関連づけ、そこからどのような展望を見出ししていくべきかが、議論の焦点となりつつあ

る現状をうかがい知ることができる。

一方、日本での用法は、何らかのウェイ・オブ・ライフを指すというよりは、正統文化である「芸術（文学、美術、クラシック音楽等）」に対して、主として若者向けの「映画、マンガ、ポップミュージック、テレビ、テレビゲーム等」（加藤 [1997: 227]）、マスメディアによって表象され、流通している各種コンテンツやその形式を言う場合が多く、専ら^{レジャー}「余暇」活動や^{プレジャー}「娯楽」の対象をサブカルチャーと呼んでいる。例えば、副題に「サブカルチャーと戦後民主主義」と掲げた大塚 [1996] を見ても、「80年代消費社会へと通底していくサブカルチャー的感受性」「消費社会的記号（サブカルチャー）」「オカルトや、ニューアカ的なく知>、アニメやコミックがもたらした世界像といったサブカルチャー」「（少女漫画における）『24年組』の登場と前後して読書に裏打ちされる類の旧『教養』が崩壊し、それをサブカルチャーが代行していく事態」「村上春樹や吉本ばななといったサブカルチャー文学」等々とあるように、ある種の共通性——①活字中心の旧世代の教養とは異なり（主としてオーディオ&ビジュアルなメディアによって媒介され）、②「軽さ・明るさ」を身上とし、すべてを相対化する「ポストモダン」の時代精神（Zeitgeist）を背景とし、③豊かな消費社会やテレビの存在を所与の前提とする（世代の）文化であるが、④そこでの微妙な差異、つまり「ちょっと変」なものへのこだわりを特徴とする、など——を帯びたコンテンツ全般が、「サブカルチャー」として括られていることがわかる³⁾。

3) もちろん日本においても、かつては60年代的な異議申し立てを背景とした「既存の権威や秩序に反抗的な、マイナーで非正統的な文化のありよう」こそがサブカルチャーであった。例えば、「この本は一九八〇年代初頭に突然湧いたアンダーグラウンドカルチャーとしての裏本の世界と、そこから派生したサブカルチャーの媒体誌としての『スクランブル』をめぐる記録である」（本橋 [1996: 323]）。しかし、80年代を経て、「サブカルチャーの主流化」（中西 [1997: 26]）という語義矛盾が、徐々に現実のものとなっていく。一方、「(YMOなど) テクノポップというものが音楽のあるひとつのアレンジ法を越えてサブカルチャーの文脈で展開していったことだ。その社会現象的ムードを一言で説明することは到底無理であり、ニューアカ、スネークマンショー、デザイナーズブランド、MANZAI、アルファ YEN レーベル、ピテカン、TRA、テクノカット、宝島などのさまざまなキーワードが当時の状況を鮮烈に思い出させるのみ」（山口 [1996: 144]）といった記述に見られるように、サブカルチャーを80年代初頭の、東京を中心とした思想的・文化的なトレンドに限定する用法もある。前者の用法からは「(主流化・量産化された) サブカルチャー⇒アニメというマブログダクト⇒宇宙戦艦ヤマト、風の谷のナウシカ……」であり、かつ後者の用法からも「(先端文化としての) サブカルチャー⇒東京トンガリキッズたちが小脇に抱えたニューアカ本ヨチベツト密教、『G S』の偽史特集……」であるがゆえに、オウムは「度し難いまでにサブカルチャーでしかない」（大塚 [1996: 251]）わけだ。また最近では「サブカル」という略語に、マスおよびメインではない、というニュアンスを含める用法が見受けられるが、その内容は Kadrey [1993] が言うところの“covert culture”や“fringe culture”、Daly&Wice [1995=1997] が言うところの“alt. culture”

では、こうしたサブカルチャー概念をめぐる、フォーク・ユースとアカデミック・ユースの乖離、そしてアカデミック・ユース内での分裂とそれにもかかわらず積み上げられてきた研究成果を前にして、私たちは今、いかに研究史を総括し、いかなる定義を「サブカルチャー」に与え、今後どのような方向に研究を発展させていくべきなのだろうか。それらの問いを考えるにあたり、以下本稿では、まずアメリカ都市社会学での議論を追い、次にいわゆる「カルチュラル・スタディーズ」での動向を概観した上で、筆者なりの概念定義を提出し、あわせてその可能性、有効性について論じていくことにしたい。

【1】シカゴ発のサブカルチャー研究

ここではシカゴ派都市社会学におけるサブカルチャー研究の伝統について、その端緒からのすべを追うことはしない。「彼自身、自らを『ネオ・シカゴ学派』と呼んでいるように（個人的対話）、コミュニティの規模、密度などの生態学的変数を重視するという点で、下位文化理論はシカゴ学派の伝統を受け継いでいる。しかし、その内容は一新され、逆転さえているのである」（松本 [1996: 406]）というクロード・フィッシャーの「下位文化理論 (subcultural theory)」を中心にみていくことにする⁴⁾。

フィッシャーによれば、ルイス・ワース以来の「決定理論 (determinist theory)」とは、「アーバニズム (すなわち人口集中) は、直接に、人々の社会生活やパーソナリティを——たいていは悪い方向へ——変化させる、と論ずる」「都市アノミー理論」であったのに対して、「構成理論 (compositional theory)」は、「このようなアーバニズムの効果を否定するもの」であり、「都市と村落との行動上の違いを、そこに住む人びとの社会的属性の違いや経済的な境遇の違いによる」との主張であったわけだが、それら両者を統合すべき「下位文化理論——私が提案しようとしている理論

——は、[社会] 構成学派の基本的な方向づけを採用する（つまり、社会的属性は最も重要である）が、アーバニズムは一定の効果をもつと考える」ものだという (Fischer [1976=1996: 44])。その一定の効果とは、「アーバニズムが、(単なるアノミーに帰結するのみではなく) 特徴的なサブカルチャーの出現と活力を支える」点においてであり、そのサブカルチャーとは、「様式的な信念や価値や規範のセットであり、それは、より大きな社会システムや文化のなかにあって、相対的に区別される (人と人とのネットワークや諸制度のセットとしての) 社会的下位体系」(Fischer [1975=1983: 57]) と定義づけられている。そしてフィッシャーは、都市の人口規模の拡大 (アーバニズム) が、サブカルチャーの「多様性 (variety)」「強度 (intensity)」「普及の源泉 (sources of diffusion)」を増大させ、それゆえ当該社会における「通念にとらわれないこと (unconventionality)」の度合いは高まる、という有名な命題を提出した。

たとえば、千人に一人がモダン・ダンスに強い関心をもっているとしよう。人口五千人の小さな町では、平均して五人、そういう人がいることを意味するが、これはせいぜいダンスについて話をするのが精一杯の数である。しかし、百万の都市では、千人になる。——これは、スタジオや、ときどきのバレエの上演や、地域の集会場所や、特別な社会環境を支えるのに十分な数である。かれらの活動は、おそらく最初の千人以外の人々を、この下位文化に引き入れるであろう (ダンス好きのあの五人組も、小さな町から移住してくる)。(Fischer [1976=1996: 57])

こうした議論に対しては、「アーバニズムのサブカルチュラル理論：20年目の検証」と題したフィッシャー自身の手による総括があるが、その中で彼は、「媒介するプロセス：アクセスの理

等と重なる部分が多い。要するに現在日本での「サブカルチャー」のフォーク・ユースは、種々雑多であるとしか言いようがない。

4) 現在、日本における「下位文化理論」は、ネットワーク分析へと展開しつつある (大谷 [1995] など)。一方、西澤 [1995] は、フィッシャーの諸命題を巣鴨とげぬき地蔵通りの分析へと展開させている。

論？」という節を設け、かつての自説の限界について次のように述べている。「近代的なテクノロジーが、身体的接触なしの相互作用を可能にするにつれ、サブカルチュラルなプロセスは集団内のアクセスビリティを基本としていることが明かになってきた」が、さらに「将来を予測すると、アクセスビリティのサブカルチュラル理論は、空間を超えたサブカルチャーの配置と機能を支配する原則を示唆するものとなろう。例えば、コミュニケーションや移動の近代的手段へとアクセスする人々にとって、通念にはとらわれない、特定の非空間的なサブカルチャーが出現するであろう」。つまり、もともと「サブカルチュラル理論は、人々 (people) に関するものというよりは、場所 (place) についてのもの」であったわけだが、各種メディアの発達により、物理的な場所がアクセスビリティのすべてを決定する要因でなくなった以上、「アーバニズムのサブカルチュラル理論は、コミュニケーションのサブカルチュラル理論の特殊な事例」とも考えられ得るというのだ (Fischer [1995 : 549-550])。

また、彼は言う。「サブカルチュラル理論は、その核心において、生態学的理論であって、人々についての理論ではない」(Fischer [1995 : 547])。フィッシャーは、アーバニズムがアノミーを決定づけるとも、社会的な属性がすべてを決定すると論じはしなかったが、アーバニズムからサブカルチャーのすべてを説明し、サブカルチャーを構成していく主体を「具体的な人々」にではなく「抽象的な人口」に求めた点で、その立論はやはり一種の「決定理論」だったのではないだろうか。そして、サブカルチャーとは、社会学者のみが発見可能、判別可能なものではなく、先述のようにさまざまなサブカルチャーという語のフォーク・ユースが存在する以上、「人々」の側も、それがサ

ブカルチャーであるか否か、また自身があるサブカルチャーに帰属するか否かを日々決定しているのではないだろうか⁵⁾。

最近のさまざまな folk concepts の出現は、私たちにサブカルチャーの概念の再検討へと誘う。私はそうしたコンセプトを「シーン」「関心 (bag)」「物事 (thing)」として語っている。これらのポピュラー・ユースは、サブカルチャーが言及する現象に有意のシフトがあることを示している。社会学においては一般に、サブカルチャーは社会学者によって認識されたパターンのサブセットを言及するものであった。上記のメタファーとしての使用は、普通の人々が認識し、反応しているパターンのサブセットとなってきたことを示している。(Irwin [1970→1997 : 66])

ジョン・アーウィンによれば、こうした変化の背景には、マスメディアやモビリティの発達、高等教育の普及などによる社会全体の「サブカルチュラルな多元化 (pluralism) と相対化 (relativism)」があり、どのサブカルチャーに属すかを自己決定できる度合いの高まりがあるという。サブカルチャー（およびサブカルチュラルなアイデンティティ）を、よりアドホックに選択され、流動的に構成され得るものとして捉えること⁶⁾。現在、サブカルチャー研究に最も必要なのは、そうした視点ではないだろうか。

サブカルチュラルな多元化と相対化は、二つの重要な影響を毎日の相互作用に及ぼす。人々の価値・信念・文化的意味は、もはや自明ではない。より頻繁に人は、それらを他人と意識的に比較し、交渉し、分有 (share) しようとする。

5) これまで逸脱のサブカルチャー研究において展開されてきた議論は、現在「レイベリングされる自己の主体的反応をレイベリング論が軽視しているという批判」(佐藤 [1994 : 81]) にさらされており、「レイベリング論から社会的相互作用論へ」(宝月 [1990])、「コンセンサスからコンフリクトへ」(石川 [1992]) といった視座の転換が求められている。

6) かつてのように確固たるコミュニティなり、サブソサエティなりが存在し、そこで分有されているものがサブカルチャーであるという説明——「サブソサエティ=サブカルチャー」との実体化 (reification) ——では間尺に合わなくなった今日、サブカルチャー研究には、「相互作用論的な枠組みによるサブカルチャーの再概念化」が必要であり、「文化的な要素の発生や活性化における対面的な相互作用の重要性を強調する」パースペクティブの導入が必須となってくる (Fine&Kleinman [1979 : 8])。また Brake [1980] も、社会的構造 (structure) から社会的相互作用 (interaction) へと、サブカルチャー研究のパラダイム転換の必要性を論じている。

さらに言えば、人はこうした要素を何らかの理論的に貫いた関係へと持ち込もうとしがちであり、それゆえサブカルチャーが明示的 (explicit) かつ重要な行為のシステムとなるのである。第二には、一般に行為のカテゴリーが、より明示的になるということである。人はより頻繁に、自身をシーンにおけるアクターとして意識する。この世は、劇場に似てきつつある。(Irwin [1970→1997: 69])

つまり、サブカルチャーの出現が「通念にとらわれないこと」に帰結するだけではなく、その「通念にとらわれなさ」ゆえに、人々は自身の思考や行動の準拠枠および準拠集団を求め、新たなサブカルチャーを出現させていくわけだ。現在、サブカルチャーの多くが folk definition もしくは self definition の問題である以上、サブカルチャーとは、日々の人々の相互作用の中から同定され、構成され、変容していくものと考えべきではないだろうか⁷⁾。そして、先ほどの「アクセスの理論？」と考え合わせるならば、各種メディアを不可分に組み込んだ都市空間や、さらにはメディア空間内に仮想的な都市が出現しつつある現在、メディア論の文脈、特に Meyrowitz [1985] 言うところの「物理的な場所 (place) ではなく、情報へのアクセスビリティに基づく状況 (situation)」の拡がりの中で、サブカルチャーは、そこでの人々の出会いや自己呈示、状況の定義、自己もしくは相互によるカテゴリー化やレイベリング等々の問題として捉え直されるべきではないだろうか。

結論を急ぐ必要はないが、とりあえずここではフィッシャーに代表されるアメリカ都市社会学のサブカルチャー研究が、諸メディアの普及・発展の問題をいかに組み込むか、またサブカルチャーという語が、単なる学術用語^{テクニカル・ターム}ではなく、なっている以上、「それは(〇〇という)サブカルチャーで

ある」と定義する主体は誰なのか、といった問題に直面していることを見てきた。それらの問題をふまえつつ、次にイギリスを中心としたサブカルチャー研究を辿っていくことにしたい。

【2】バーミンガム発のサブカルチャー研究

ここで言う「カルチュラル・スタディーズ (以下、CS)」とは、60~70年代にバーミンガム大学現代文化研究所 (CCCS) を拠点とし、レイモンド・ウィリアムズら British Marxist critics と同時に、ルイ・アルチュセールやアントニオ・グラムシなど Continental theorists の影響下において、現代社会を批判的に検討したグループ (とそれに続く人々) の文化研究、ぐらいに理解しておきたい。その研究対象は実に多岐にわたっているが、初期においてはメディア研究とユース・サブカルチャー研究とが、このグループの両輪をなしていたことは確かであろう。彼らのサブカルチャー研究の成果は、スチュアート・ホールらによってまとめられた『Resistance through rituals』に集約されている⁸⁾。

その序文によれば、ベッカーらアメリカ社会学における「(逸脱の) サブカルチャー研究」に対して、CCCS のメンバーが抱いていた異和感——「逸脱行動は、公的なレイベリング以外にも起源をもつという感覚、この落ち着かない感じ」——に、「経験的かつ理論的な実質を与えたのは、フィル・コーエンの (ロンドン) イーストエンドの階級構造と階級文化の中でのユース・サブカルチャーとその生成に関する論文」であったという。コーエンによると

上流階級の服のスタイルの、「テディボーイ」による徴用 (expropriation) は、おおむね非熟練の肉体労働で、ルンペンに近い実際の仕事やそのライフ・チャンスと、土曜の夜の「着飾って、

7) 例えば永井良和は、日本での社交ダンスの普及過程の研究を通じて、フィッシャーの諸命題に則ったかたちでの説明に魅力を感じつつも、「豊富な具体的事実はモデルに回収されることを受けつけない」として、「下位文化が都市の公共空間で『見られる』ことによってどう変容したか」や「都市では異質な下位文化が出会う。その出会い方が、『見る』側と『見られる』側との相互作用を通してコントロールされる」ことへと関心を集中させていった (永井 [1991: 287])。

8) CCCS の90年代版ともいうべきマンチェスター・ポピュラーカルチャー研究所による 'sub/club culture' 研究については、Redhead (ed.) [1997] 参照。

どこにもいくところのない」経験との間のギャップを「覆い隠す」ものである。こうした消費とスタイルそれ自身の徴用と物神化という点で言えば、「モッズ」は、終わることない週末と、月曜の退屈で未来のない仕事の再開との間のギャップを覆い隠すものである。そしてスキンヘッズは、労働者階級の服装の、典型的かつ「象徴的」（しかし、実はアナクロの）形式の復活において、またフットボールの試合への代用的な熱中、試合「結果」への「専心」によって、既に労働者階級の大人たちの少数しかもっていない「仲間意識」や階級の価値、スタイルの本質を（想像上ではあっても）取り戻そうとしている。それは、都市計画家や理論家が急速に壊そうとしているテリトリーやローカリティの感覚の「表象」である。(Clarke et al. [1975 : 48])

第二次大戦後、ワーキング・クラスの街であったイーストエンド地区は、都市再開発ジェントリフィケーションや一部労働者のブルジョア化にともない、コミュニティとしての内実を失いつつあった。そうした背景のもと、まず50年代のストリートには、「エドワードリアン・ルック」を引用したテッズが、続いて60年代には中産階級的なスーツ——親たちの労働者階級文化からの離脱、ホワイトカラー的な仕事や身なりへの上昇指向——に身を包んだモッズが登場する一方で、60年代後半には、親世代の文化への過度なまでの同一化を特徴とする、スキンヘッズの若者たちがその姿を現していた。そして、それらイーストエンドの労働者階級のユース・サブカルチャーからすれば、「ヒッピー・ムーブメント、さまざまな『逸脱的』ドラッグ、ドロップアウト、ゲイ・サブカルチャー、学生運動の文化的反抗の要素」等々のカウンターカルチャー現象は、あくまでも「中産階級の文化」として位置づけられるのだという。このように CCCS のサブカルチャー研究は、一見クラスレスな「若者文化 (Youth culture)」——余暇産業・ファッション産業とリンクしたティーンエイジ市場——のファッドやモードを、再度「階級」の視点から捉え返すとともに、逸脱や非行の社会学の多くが、暗黙のうちに（北米の）ミドルクラス文化をゴールとしてきたことを暴きだした。

しかし、もちろん彼らも階級関係によってすべてが説明し尽くせると考えていたわけではない。教育、雇用、消費、年齢（および世代）といったさまざまな変数の登場によって、生産や労働の場での「階級」概念からのみサブカルチャーを理解することは、既にこの時点で疑問符が付けられていた。ジョン・クラークは言う。「労働者階級のサブカルチャーの場合、その限界の一般的な源は、余暇を『相対的に階級から自由な』重要な領域であると見なす、彼らの親たちの文化の問題のある部分を、さらに強調して採用する点にある。こうした領域だけでの『解決』の提示では、サブカルチャーな運動は、彼らが直面している矛盾を解決する『マジカルな』試みと化す」(Clarke [1975 : 189])。つまり、サブカルチャーの舞台が、主として余暇や娯楽の場にある以上、いずれそのスタイルは“marketable”なものとして、「最終的には『マス』文化的・商業的現象へと至る」わけだ。中でも「ビートルズの時代は、サブカルチャーなスタイルに起源を持つものが、商業的な組織化とファッションへの徴用を通じて、純粋な『市場』もしくは『消費者』のスタイルへと転化していく道筋の、最も劇的な例の一つである」(Clarke [1975 : 187])。

このように消費の場にこそ、人々のアイデンティティの問題の重心が移っていく中で、CS のサブカルチャー研究は、労働者階級の社会的再生産の問題——労働者の子供はなぜ労働者となるのか——から、バイカーやヒッピー等を事例としたサブカルチャーの（再）生産過程の検討を経て、「消費文化論としての再生産論」へと移行していったポール・ウィルスや、エスニシティの問題を重視したディック・ヘブディジ、ジェンダーの問題にスポットをあてたアンジェラ・マクロビーなど、多様な視点を導入することで新たな展開をはかってきている。しかし、無論このことは、CS の批判性・政治性の低減を意味するものではない。

（モッズとロッカーズが衝突した1964年のブライトンでの事件以後）消費の政治学は、少なくとも失業中の若者にとって、欲望と意味の不在、レンガと店のウィンドウという、単純な敵

対物、緊張の一点への統合であろう。暴動者と略奪者にとってのターゲットは、十分予測可能なことではあったが、タウンホールや職業紹介所、学校や工場ではなく、さらに少なくとも頻繁には警察署でもなく、むしろビデオやハイファイのショップであり、ブティックやレコード店であった。労働する権利は、消費する権利に包含されている。(Hebdige [1988: 35-6])

つまり、階級的な対立を基軸に据えないにしても、「サブカルチャーは、被支配的文化 (dominated culture) から産み出されるのであって、支配的文化 (dominant culture) から産み出されるものではない」(Cohen [1972: 97]) という視点は一貫しているのだ。

では、こうしたCSでのサブカルチャー研究から継承すべき点は何か。それは第一に、サブカルチャーを第三者からのレイベリングの問題としてではなく、当事者 (およびグループ) 間の多様な交渉、拮抗を通じての「意味づけ」の問題として捉え、その具体的な様相を記述しようとした点であろう。ホールの有名な「エンコーディング (encoding) / デコーディング (decoding)」の概念は、アメリカの経験的メディア研究につきまとう「S-R」図式的な受け手像への批判であるとともに、支配的な言説に対する「交渉的 (negotiated) コード」「対抗的 (oppositional) コード」に基づく多元的な読みや「再分節化 (re-articulation)」の可能性を示唆している (Hall [1980] [1982])。例えばヘブディジによれば、モッズたちは、Vespa というスクーターへのメーカー (広告主) 側の「おしゃれでフェミニンな」という意味づけ (分節化) に対抗し、自らの「アイデンティティ・マーカー」というまったく異なる意味づけ (再分節化) を採用したのだという。「社会学的・マケ

ティング的な資料によれば、モッズとは、おおむね日用品の選択のことである。日用品のチョイスを通じてのみ、モッズは自身をモッズとしてマークし、それら商品^{グッズ}を、自身の周囲に存在する、相いれないティーンエイジ・テイストの世界 (テッズ、ビート族、後にはロッカーズ) からの汚染を防ぐための『排除の武器』として用いた」(Hebdige [1988: 110]) ののである⁹⁾。

つまり、社会の多元化・流動化は、ある「物事 (thing)」や「シーン」に対して、特有の意味づけを創出し、共有する一種の「解釈共同体」の出現——最終的には商業的・産業的な組織化や徴用が待っているにせよ——をもたらしたわけだ。それゆえ、例えばモッズは、イーストエンドという物理的な空間にも、労働者階級という出自にも縛られず、広く同時代の若者たちの間にそのスタイルを波及させていき、さらには映画や音楽等を介して、60年代のイギリス社会に止まらない存在へと転化していった¹⁰⁾。現に90年代の日本社会においても、原モッズと「スタイルの意味」を共有する「(ネオないしはネオネオ)モッズ」たちが、大都市に限らず全国各地で、さまざまな階級・階層から輩出されているわけだが、では、そうした彼・彼女たちがシェアしているものまでを、はたして「サブカルチャー」と呼ぶべきであろうか。当然この問いは、本稿の主題である「サブカルチャーという語をいかに定義するか」とも密接に関わってくる。

こうした問いに対する本稿の基本的な立場は、これまで述べてきた英米での議論の流れをふまえ、現在ある文化 (的集団) の成り立ちを、何らかの単一の社会的要因——「場所 (place)」にしる「階級 (class)」にしる——にのみ還元することが不可能である以上、さらにはサブカルチャーという語のフォーク・ユースが、既にそれら「ネオ (ネオ)・モッズ」を指してサブカルチャーと呼び

9) ヘブディジは「所与の階級構造がサブカルチャーを枠づけているというよりも、サブカルチュラルな実践の方が、グループの階級的、人種的アイデンティティの構成的な契機として作用している」(吉見 [1997: 106]) ことを明かにした。

10) かつてヘブディジは、「主としてロンドンおよびイギリス南部のニュータウンに住む労働者階級のティーンエイジャーで、特徴的なヘアスタイルや服などによって容易に識別できるもの」(Hebdige [1975: 87]) とモッズを定義し、その終焉をマスメディアによる「徴用」の中に見ていた。「モッズマガジンが、『ニュー・モッズ・ウォーク: 足を外に向け、頭を上げ、ジャケットのポケットに手を入れる』の存在を権威をもって宣言したとき、否応なくこの特殊な white negro は、列をなして転覆し、死ぬことを知らなければならなかった」(Hebdige [1975: 94])。モッズないしネオ・モッズの実際については、Polhemus [1994=1995] 参照。

慣わしている以上、今日の日本社会におけるモッズの末裔たち（の分有しているもの）までをも一つのサブカルチャー、ないしはモッズというサブカルチャーの亜種として認め、そうしたさまざまなヴァリエーションを包摂し得るかたちでサブカルチャー概念を再定義の方がより現実的だ、というものである。以下、この定義の問題について節を改めて論じることにしたい。

【3】「サブカルチャー」概念の再定義

以上、都市社会学やCSでの成果を検討し、今日「①サブカルチャーのありようと、通信・放送・複製などの各種メディアの発達・普及とは不可分な関係にあること」、また「②それをサブカルチャーであると定義し、構成していく主体は、マスコミや公的権力、研究者など当該文化に外在する者たちの側だけではなく、その成員（および成員予備軍）の側にもあること」、ゆえに「③あるサブカルチャーの成員であることは、その人が帯びている何らかの社会的属性によって先験的に決められているのではなく、その場その場で選択され、決定され得るような性質のものとして化していること」といった論点をいかに研究に組み込むかが、問題の焦点となりつつある現状を見てきた。こうした議論をふまえ、「サブカルチャー」の定義を探っていくために、まずここでは現象学的な社会学の系譜を参照することから話を始めたい。

例えば、エスノメソドロジーにおいてはハーヴェイ・サックスが、“Hotrodder”と呼ばれる改造車マニアの若者集団を取り上げ、『ティーンエージャー』というカテゴリーと『ホットロッダー』というカテゴリーの大きな違いは、『ティーンエージャー』はおとなが管理するカテゴリーであるという点にあり、一方ホットロッダーというカテゴリーは、「運転している誰かが、どのカテゴリーのメンバーなのか、またメンバーの資格としてどんなことが必要なのかを識別するのは、ほかならぬ彼ら（一緒に乗っている若者たち）だということである。すなわちサンクションをあたえることができるのは彼らだということである」

(Sacks [1979=1987:28-30])と論じている¹¹⁾。

複数名の人々が互いの存在を認識しあっている、時間的・空間的に限られた状況（およびその状況下にある物事や人、そこに共在 (copresence) する人々の経験）に対する定義づけの問題を論じたアーヴィン・ゴフマンの“Frame analysis”の用語にしたがえば、この場合は、異様な改造車の周囲に集う若者たちを目にした時に、多くの人々が「不可解なクルマ（と集団）である」との「状況の定義 (=フレーム)」——もしくは定義不能——を与えたということになる。そしてゴフマンは、その状況への参加者が、ふつう第一義的に持つであろう状況の定義を、特に「一次的枠組み (primary framework)」と呼んだが、ホットロッダーの場合、50年代アメリカ社会において若者の典型としての「それはティーンエージャーである」がプライマリに存在するがゆえの、ホットロッドの「通念にとらわれなさ」加減だったのである。つまり、一般的・常識的な若者への定義づけに対して、ホットロッダーたちの間においてのみ、「それはホットロッド (文化の産物) である」「われわれはホットロッド的である」といった定義が共有されており、当初ホットロッダーと非ホットロッダーとはまったくの異文化状態にあったがゆえに、ホットロッドはその社会の自明性——エスノメソドロジストたちが探求し続けている「日常知」「背景知」——に対し、サックス言うところの「革命的カテゴリー」であったわけだ。だが、ホットロッドに対する世間の理解が進むにつれ、ホットロッダーではない（その状況への）参加者やマスコミ等によっても、「それはホットロッドである」と容易に同定されるようになれば、やがてその定義は、その社会において通念的なもの、プライマリなものとして日常知の中に埋め込まれていくことになる。

またゴフマンは、「ある外見が、異なる場面では異なる意味を持つことは明かである。ディナーの皿をすっかり平らげた人は、飢えているとも、礼儀正しいとも、大食漢とも、儉約家とも見なしうる。だが通常、文脈 (the context) は誤った解釈を排除し、正しいそれを招来する」ものであり、

11) ホットロッダーについては、Moorhouse [1986]・Batchelor [1995]・Roth & Thacker (eds.) [1995] 参照。また好井 [1992] は、この問題を「カテゴリー化の自己執行 (self-enforcement)」として論じている。

その文脈とは「あるフレーム理解と両立可能で、その他のものとは両立不可能な、直接的に利用し得る事象 (events) として定義される」(Goffman [1974: 440-1]) と述べ、そうしたあるフレームを確定し、維持するのに必要な「文脈=Σ事象」として、何らかの「マテリアルないしはリソース」「(定義の及ぶ時間的・空間的な範囲を示す) 合図 (cue) や括弧 (bracket)」「その状況への参加者 (participants)」等を挙げている (Goffman [1974: 45])。「それはホットロッドである」の場合で言えば、その文脈とは、何よりもスピードを出すためだけにチューンされたアメリカ車であり、干上がった湖底や深夜の街路などドラッグレース可能な場であり、そこに集う人々——当時生まれたばかりのロック & ロールを愛好する、クルーカットおよびリーゼントの白人男性——であり、その名も“Hot Rod”という雑誌や“Hot rods to hell”“Hot rod rumble”といったB級ムービー等であったわけだ。このようにサブカルチャーなフレーム——その社会において一般的、常識的なものではない、「これは〇〇である」「われわれは〇〇である」という自己 (および他者) や状況への定義づけ、およびその定義の共有——の設定と保持は、特定の意味づけをされた何らかの「アイデンティティ・マーカ―」との相関においてなされるわけだが、その具体例はすぐに思いつくだけでも、モッズにとってのイタリアンスーツやスクーター、ヒッピーにとってのピースサインやビーズのアクセサリ、ラスタファリアンにとってのラスタカラーやレゲエミュージック、スキンヘッズにとってのパブ (で飲むビール) やタトゥー等々と枚挙に暇がない¹²⁾。

つまりサブカルチャーとは、これら、当該文化への同定に不可欠な artifact (人工物) および setting (道具立て、舞台装置) や、特有の身振りや身体装飾、口調や表情といった自身の身体 (技

法) を通じて実践されていくものであるとともに、そのフレームを特定するために参照され、援用される文脈もまた、人々の相互作用の中から構成されていくものなのである。そして、サブカルチャーの成員であることは、その文化の他の成員だけではなく、他文化の成員や社会全般、そして自分自身に対しても、その都度その都度表明され、表現され、かつ当該文化への帰属は、その度毎に確認もしくは否認されていくものなのである。現在、そうした自己呈示と相互作用の及ぶ範囲は、対面的・同期的な場面のみには止まらず、各種メディアの発達・普及によって「括弧 (に括られた状況)」のありようは拡張を続けており、またこれら諸メディアも、自己 (および他者からの) 呈示の「透明な」手段であるだけではなく、それ自体 (もしくはその使用や所有自体) に何らかのサブカルチャーな意味づけを負っている場合——例えば、ハッカー (Hacker) およびナード (Nerd) や「秋葉系」オタクにとってのパソコン——も十分考えられ得るのだ。

そこで本稿では、サブカルチャーの定義を「ある状況において『自分 (たち) は、当該社会において通念的ではない〇〇である (と呼ばれている)』ことを、そこに共存する他の参加者に向かって、特有のモノおよびシーン <便宜的にメディア 1 とここでは呼ぶ> や、成員の身体 <同様にメディア 2>、時には通信・放送・複製などの各種メディア <同様にメディア 3> を用いて呈示し、その相互作用の過程を通じて〇〇であることを特定され、認証された (と思っている) 人々が共有する文化」としておきたい。ゆえに以後ここでは、何かしらサブカルチャーな意味づけを帯びている (と解釈される) 事象全般を <メディア> と呼び、通常われわれが文字・音声・映像などの伝達や再生等に用いている諸メディアを、特に <メディア 3> と表記する¹³⁾。

12) ゴフマンの言う「アイデンティティ・キット」(Goffman [1961=1984: 22])。こうしたゴフマンの議論を、日本のヤクザ・サブカルチャーに敷衍した研究として Raz [1996=1996]。

13) 例えば95年前後の日本社会における「コギャル」の場合、<メディア 1> にあたるのがルーズソックスやミニスカート、ファーストフード店やカラオケボックスなど。<メディア 2> にあたるのが独特のメイクや茶髪、コギャル語など。またコギャルは、ストリートという物理的空間以外にも、他のコギャルとの共存をつくりだす <メディア 3> としてプリクラやポケベル・PHS などを用い、さらには各種マスメディアによる援助交際報道や彼女らをモデルとして起用した「ストリートマガジン」等によって、その像 (image) は多くの人々の目に触れていくことになる。

こうしたサブカルチャーをめぐる概念規定を行なう理由は、これまで述べてきたような地域や社会階層に単純に還元し得ないサブカルチャーの登場、中でも「ある〈メディア1・3〉」の消費、さらには〈メディア2〉の改造のための消費を通じてのサブカルチャー」の領域拡大の問題を捉えるのに有効であると考えたからである。消費行動の研究者たちによって、「現在の消費者文化において、人々は自身を社会的な構成によってではなく、自身の生活に意味を与える活動・モノ (objects) ・関係といった観点から定義している。社会における自身の位置を具体化するのにはモノ、とりわけ商品であり、それらを通じてわれわれは他の人々と関係し、価値や関心の共有を確認しあっている」(Schouten&McAlexander [1995: 59]) と語られるような傾向は、今日強まりこそすれ、決して緩まることはない。また、ビートルマニア (Ehrenreich et al. [1992→1997]) やスタートレッカー (Jenkins [1992→1997]) など、マスメディア上のコンテンツ——後に「ファンジン (同人誌)」などのよりサブカルチャーな〈メディア3〉の発生——にフォーカスしたサブカルチャーや、「チーマー」「コギャル」にとってのポケベルやプリクラなど、特定のデバイスの所有や使用によって支えられたサブカルチャー、さらにはいわゆる「サイバースペース」内でのヴァーチャルな分身〈メディア2〉による出会いと相互作用の中から形作られていくサブカルチャーの出現 (Bassett [1995→1997]) といった動きは、今後ますます加速していくであろう。

そして、これら〈メディア1・2・3〉は、複雑に絡まり合いながら各々のサブカルチャーを生成し、変容させ、80年代日本のネオ・モッズ、90年代日本のネオネオ・モッズのように、〈メディア3〉による (〈メディア1・2〉の) 時空を超えた呼応・伝播——「私たちは、ユース・サブカルチャーが、一つの文化的文脈から他の文脈へと転移する問題について語るべき位置にきた」(Strat-

ton [1985→1997: 190]) ——すらも当たり前のこととなってきている。つまり、サブカルチャーなアイデンティティは、ますますアドホックに、パフォーマンスに構成され、随時、任意に書き替え可能なものと化しているのだ。こうした現状を鑑みれば、フィッシャーがアーバンイズムのサブカルチャー理論を「コミュニケーションのサブカルチャー理論」の上に構築し直そうとした意味を、既製のディシプリンやスクール分けにとられることなく考えるべき地点に、今われわれがいることは確かであろう¹⁴⁾。

おわりに

以上、これまでの研究をサーベイしながら、ゴフマンらの議論を補助線としつつ、筆者なりのサブカルチャー概念を提示してきたわけだが、最後にこの定義に関して当然よせられるであろう疑問や、留意すべき点についてふれておきたい。

まず、その時代や社会における日常知・背景知からの背反、すなわち「通念にとらわれないこと」をサブカルチャーであるか否かのメルクマールとした点に関しては、「抵抗 (resistance)」をサブカルチャーの本質と捉えたCSの伝統からすれば、ある種の後退と見えるかも知れない。通念的でないという点で言えば、自身が「一般ピープル (略してパンピー)」とは違うことにステイタスを感じていた、80年代の日本版ヤッピー「ヤンエグ」や90年代の「シャネラー (など特定ブランドのファンカルチャー)」等の、より享乐的 (hedonistic) な、さらにいえばより支配的な消費文化のありようも、当然一種のサブカルチャーということになってくる¹⁵⁾。しかし、サブカルチャーという語のフォーク・ユースが、少なくとも日本では、既にそれらの現状肯定的な文化をも指示し始めている以上、今必要なことは、「サブカルチャーが抵抗や対抗であるか否か」の議論ではなく、社会的なヒエラルキーにおいて支配的な地位を占めるも

14) この場合のコミュニケーションとは、ニコラス・ルーマン流の「複雑性を縮減させるもの」といった意味合いとは違う。ルーマン以降の社会システム論を背景に、複雑性の縮減の問題として、サブカルチャー (の選択) を論じたものに宮台 [1993] がある。

15) 大平[1990]での「モノ語り」を参照。また本稿の立場は、「サブカルチャーコカウンターカルチャー」というものであるが、両者の間に一線を画す定義づけのあり方としては、De Certeau[1980=1990]・青木[1989]・高田[1994]など。

のも含め「さまざまなサブカルチャーがどのように関係し、拮抗し、そこでいかなる力が作用しているか」の具体的な検討ではないだろうか。

抵抗の純化とも、カリカチュアとも思えるパンクスたちでさえ、予めファッション産業や音楽産業に組み込まれた存在——その発端はマルコム・マクラーレンとヴィヴィアン・ウエストウッドのブティック“セックス”——であったように、「サブカルチャーは本来的に抵抗的である」もしくは「商業化によって一方的に汚染される」と考えるよりも、現在サブカルチャーの多くは、時に抵抗的であり、時に体制的であるという二面性を最初から内包しており、その時々々の環境下でダイナミックに意味合いを変化させていくものとして捉えるべきではないだろうか。本稿でゴフマンの“フレイム・アナリシス”に注目したのも、そのパースペクティブからは、プライマリな状況定義とは、至高のもので、予め決定されたものでもなく、その定義は参加者の相互作用の中から時々刻々と転形し、変化し続ける、という視野が開けてくる点にあった。もちろん“フレイム・アナリシス”という著作が、用語法や分類法の段階に止まっていたのと同様に、本稿での議論も概念整理の域を出ていない。ここでの概念設定が、どのように具体的なサブカルチャーの分析や記述に有用なのか、さらには、そうしたサブカルチャーの発生・変容・伝播から、いかなる社会的な含意が汲み取ることができるのか等々の問題については後日を期すしかない。

しかし、今日のサブカルチャーのあり方が照射する現代社会の側面について、現時点での見通しめいたものを挙げておけば、つねに暫定的に「断片的社会化」（加藤 [1995]）を遂げていかざるを得ない、われわれの自己のありようが浮かび上がってくるのではないだろうか。むしろ「社会化（socialization）」と言っても、何も若者たちだけに限った問題ではない。サイモン・フリスは言う。「若者文化の真実は、彼らが労働、家族、将来

の問題を自由時間にずらすところに」あり、「若者の余暇の使い方が資本主義的自由と拘束の問題を最も鋭く、また最も広い範囲で提起」してはいるが、そうした「若者問題は年長者にもあてはまる」（Frith [1978=1991:237]）。現代（の消費および情報化）社会においては、相対的に「よりプライマリな自身への定義」しか存在しない以上、誰にとっても「この世は、劇場に似てきつつある」のであり、その都度「今、ここで」の自己を定義づけ、当座の間、自身を投錨させるべきサブカルチャーの成員としての「社会化」をはたさざるを得ないのだ¹⁶。

そして、そうした自己のありようは、エドワード・ホール¹⁷の有名な概念を用いるならば、現代社会全般の「低コンテクスト」化を示唆しているのではないだろうか（Hall [1976=1993]）。つまり、すべての物事に対する意味づけ、価値づけが不確かであるからこそ、不断のサブカルチャラルな実践によって「高コンテクスト」な安住の地をつくりださざるを得ないわれわれの現在が、垣間見えてくるのではないだろうか。しかし、せっかくあるサブカルチャーを自身（たち）の手によって構成し、自己をそこに同定し得たとしても、目まぐるしい現代社会においては、すぐにその新奇性や凝集性は雲散霧消してしまう。そして結局、サブカルチャー（とその〈メディア〉）とは、自らが作り出すのではなく、マスメディアによって与えられた出来合いのものを、ショーウィンドウの中から選ぶことでしかなくなっていく……。

冒頭のレントンの体験に話を戻すならば、「ゲイのスキンヘッド・ナイト」自体が、ゲイ文化やスキンヘッズ文化の輪郭の曖昧化、流動化を示してはいまいか。もともとスキンヘッズは、男らしさ（masculinity）へのこだわりゆえに、ゲイと敵対していたはずである。こうしたスキンヘッド（という髪形？）のように、あるサブカルチャーにおいて意味づけられていたはずの〈メディア1・2・3〉も、その文化や社会から脱文脈化され、他

16) ロンドンにおける1970年と93年の大学生を対象とした調査結果の比較からは、「80～90年代を通じて、階級は文化的経験の決定的要因ではなくなる一方で、年齢集団・エスニシティ・ジェンダー・ライフスタイルを基礎とした、新たな多面的なアイデンティティが優越してきており、こうした近年の変化は、アイデンティティの細分化と消費の多様化といった、ポストモダニズムへの一般的な動きの一部と見ることができる」（Smee [1997:324]）という。

の時代や地域において再文脈化され、新たな意味を付与されていく。そうした「何でもあり」の状況下にあるからこそ、『トレイン・スポッティング』では“Choose your future”のメッセージ——人生を選べ、仕事を選べ、家族を選べ、くだらなくてっかいテレビを選べ……——が繰り返されていたのだ（現にレントンは、最後にはすべてのアイデンティティを脱ぎ捨てて、アムステルダムへと向かう）。かつて“No future”と叫んで自滅したパンクスたちとは、あまりに対照的な明るく、軽やかな、そして終わることのない新奇なサブカルチャーへの翻身（alternation）ではあるが、そうしたレントンたちのウェイ・オブ・ライフのありようを、何らかの社会的属性や要因に短絡させることなく、彼らなりの〈メディア〉の選択や意味づけの実際を精査すること。そうした作業を通じてのみ、サブカルチャーを論じることで現在の社会や文化情況の全体を見通し、かつそのサブカルチャーを当該社会や全体文化の中に位置づけていく道筋が明かになってくるであろう。

引用・参考文献

- 青木秀男 1989 『寄せ場労働者の生と死』明石書店
 Bassett, Caroline 1995 'Virtually gendered : Life in an on-line world', →in Gelder & Thornton (eds.) [1997]
 Batchelor, Dean 1995 "The American hot rod" Motorbooks International
 Brake, Mike 1980 "The sociology of youth culture and youth subcultures" Routledge
 Clarke, John 1975 'Style', in Hall & Jefferson (eds.) [1975]
 Clarke, John et al. 1975 'Subculture, culture and class : A theoretical overview', in Hall & Jefferson (eds.) [1975]
 Clarke, Michael 1974 'On the concept of "subculture"', "The British J. of sociology" 25-4
 Cohen, Phil 1972 'Subcultural conflict and working-class community' →in Gelder & Thornton (eds.) [1997]
 Daly, S. & Wice, N. 1995 "Alt. culture", =1997 吉岡正明訳『オルタ・カルチャー』リプロポート
 De Certeau, Michel 1980 "La culture au pluriel", =1990 山田登世子訳『文化の政治学』岩波書店
 De la Haya, A. & Dingwall, C. (eds.) 1996 "Surfers soulies skinheads & skaters" The Overlook pr

- Ehrenreich, Barbara et al. 1992 'Beatlemania', Lawis, Lisa (eds.) "The adoring audience" Routledge
 Fine, G. & Kleinman, S. 1979 'Rethinking subculture : An interactionist analysis', "American J. of sociology" 85-1
 Fischer, Claude 1975 'Toward a subcultural theory of urbanism', =1983 「アーバニズムの下位文化理論に向けて」, 奥田道大・広田康生編訳『都市の理論のために』多賀出版
 1976 "The urban experience", =1996 松本康・前田尚子訳『都市的体験』未来社
 1995 'Toward a subcultural theory of urbanism : A twentieth-year assessment', "American J. of sociology" 101-3
 Frith, Simon 1978 "Sound effects", =1991 細川周平・竹田賢一訳『サウンドの力』晶文社
 Gelder, K. & Thornton, S. (eds.) 1997 "The subcultures reader" Routledge
 Goffman, Erving 1961 "Asylums", =1984 石黒毅訳『アサイラム』誠信書房
 1974 "Frame analysis : An essay on the organization of experience" Harvard Univ. pr
 Hall, Edward 1976 "Beyond culture", =1993 岩田慶治・谷泰訳『文化を超えて』TBSブリタニカ
 Hall, Stuart 1980 'Encoding/decoding', CCCS (ed.) "Culture, media, language" Hutchinson
 1982 'The rediscovery of "ideology"', Gurevitch, M. et al. (eds.) "Culture, society and the media" Methuen
 Hall, S. & Jefferson, T. (eds.) 1975 "Resistance through rituals" Routledge
 Hebdige, Dick 1975 'The meaning of Mod', in Hall & Jefferson (eds.) [1975]
 1979 "Subculture : The meaning of style" =1986 山口淑子訳『サブカルチャー』未来社
 1988 "Hiding in the light" Routledge
 宝月誠 1990 『逸脱論の研究』恒星社厚生閣
 Irwin, John 1970 'Notes on the status of the concept subculture', →in Gelder & Thornton (eds.) [1997]
 石川准 1992 『アイデンティティ・ゲーム』新評論
 Jenkins, Henry 1992 "Textual poachers" Routledge
 Kadrey, Richard 1993 "Covert culture sourcebook", St. Martin's pr
 加藤宏 1997 「アート」, 鈴木智之・澤井敦編『ソシオロジカル・イマジネーション』八千代出版
 加藤隆雄 1995 「社会化 ポストモダンの曠野より」, 門脇厚司・宮台真司編『[異界]を生きる少年少女』東洋館出版社
 McRobbie, Angela 1991 "Feminism and youth culture" Macmillan

- 松本康 1996 「クロード・S・フィッシャーの『アーバニズムの下位文化理論』について」, クロード・S・フィッシャー著松本康・前田尚子訳『都市的体験』未来社
- Meyrowitz, Joshua 1985 "No sense of place" Oxford Univ. pr
- 宮台真司 1993 『サブカルチャー神話解体』パルコ出版
- Moorhouse, H. F. 1986 'Racing for a sign : Defining the "Hot Rod" 1945-1960', "J. of popular culture" 20-2
- 本橋信宏 1996 『裏本時代』飛鳥新社
- 永井良和 1991 『社交ダンスと日本人』晶文社
- 中西新太郎編 1997 『子どもたちのサブカルチャー大研究』労働旬報社
- Nelson, Cary et al. 1992 'Cultural studies : An introduction', Grossberg, Lawrence et al. (eds.) "Cultural studies" Routledge=1996 浜邦彦訳「カルチュラル・スタディーズとは何か」『現代思想』24-3
- 西澤晃彦 1995 『隠蔽された外部』彩流社
- 大平健 1990 『豊かさの精神病理』岩波書店
- 大谷信介 1995 『現代都市住民のパーソナル・ネットワーク』ミネルヴァ書房
- 大塚英志 1996 『「彼女たち」の連合赤軍』文芸春秋
- Polhemus, Ted 1994 "Streetstyle", =1995 福田美環子訳『ストリートスタイル』シンコーミュージック
- Raz, Jacob 1996 "Anthropology of YAKUZA", =1996 高井宏子訳『ヤクザの文化人類学』岩波書店
- Redhead, Steve (ed.) 1997 "The clubcultures reader" Blackwell
- Roth, E. & Thacker, T. (eds.) 1995 "Hot rods" Motor-books International
- Sacks, Harvey 1979 'Hotrodder : A revolutionary category', =1987 「ホットロッダー」, 山田富秋ほか編訳『エスノメソドロジー』せりか書房
- 佐藤恵 1994 「社会的レイベリングから自己レイベリングへ」『ソシオロギス』(18)
- Schouten, J. & McAlexander, J. 1995 'Subcultures of consumption : An ethnography of the new bikers', "J. of consumer research" 22-1
- Smee, Michael 1997 'Consumption and identity before going to college, 1970-93', Nava, Mica et al. (eds.) "Buy this book" Routledge
- Stratton, Jon 1985 'On the importance of subcultural origins', →in Gelder & Thornton (eds.) [1997]
- 高田昭彦 1994 「サブカルチャーとネットワーク」, 庄司興吉・矢澤修次郎編『知とモダニティの社会学』東京大学出版会
- 山口優 1996 『「テクノ」とサブカルチャー』, 『モンドコンピューター』アスキー出版局
- 好井裕明 1992 「〈生〉のせめぎあいと出会う場所」, 好井裕明編『エスノメソドロジーの現実』世界思想社
- 吉見俊哉 1997 「サブカルチャーと差異をめぐる政治」, 栗原彬編『共生の方へ』弘文堂

Rethinking ‘sub-culture’

ABSTRACT

In the social science literature concept of ‘sub-culture’ has been used in a very ambiguous way. In this paper, I try to analyse the meanings of the term in the studies in the fields of Urban Sociology and Cultural Studies. I propose a new definition of the term ‘sub-culture’ which is more suited to the societal and cultural conditions of today. As a result of the analysis, I want to point out that a new definition is necessary in order to take into account of the development of the various media, to reflect the folk-use of ‘sub-culture’, and to consider present conditions. The reason for the emergence of one cultural style cannot be reduced to a single factor, such as class or location. Accordingly, I still think that ‘sub-culture’ is the culture which is shared by people who think they are sanctioned to belong to a culture that is unconventional in the larger society. The membership in one sub-culture must be identified each time by the others who are co-present in the situation which is temporally and spatially delineated. Finally, I define the factors that indicate the membership in one sub-culture as ‘media’. For example an artifact, setting, one’s body, a device that represents text or image, the contents themselves that are represented by some devices, all identify subcultural membership.

Key Words: Sub-culture, Media, Frame analysis